

# 共に違いを認め合って共生へ！

共生学級「エスペランサ」指導員 藤木・サンドラ・ハルミさん



藤木・サンドラ・ハルミさん

私は、昨年度岐阜県国際交流センターからブラジル人相談員として美濃加茂市の国際交流協会に派遣されました。市役所へ訪ねてくるブラジル人の相談や市民課などの通訳としての活動以外、市内の小中学校7校を巡回していました。

〈中略〉

最初のころは、日本の学校のことを何も分からずの日々が続きました。そして少しずつブラジルの学校にないものが分かってきました。通学班、朝の会、終わりの会、クラス分け、係、〈中略〉、計算の仕方、自分の住んでいる区域外の

小中学校には通えないことなど、たくさんブラジルの学校と違うところがあることが分かってきました。それと同時にさまざまな問題にも出会いました。いじめ、登校拒否、やる気のなさ、迷い、日本の学校のシステムに適應する難しさ、エスケープ、保護者の子どもの悩みへの無理解、保護者との連絡の難しさ、子どもたちの落ち着きのなさ、学校の規則を守らないことなど、ほとんど習慣の違いと言葉の壁が生じたものです。

日本の学校に入ってくる子どもたちは、たくさんの方達を作ろうと期待を胸いっぱい抱いてきます。でも、日本語が分からず、もちろん日本の習慣も分からずにきます。そこで、その子どもたちの周りにも、私たち、「バーカ」とか言い合ったり、背中をたたいたりしてあげているところを見て、こうすれば友達ができるのかと思ひ、同じことをします。

小学生ぐらいだとそれでうまくいくこともあります。中学生だとそう簡単にはいきません。ブラジルやラテンアメリカでは、初めて会った同士でも2・3日でお互いある程度の気持は許すので、背中をポンとたたかれてもなんとも言いませんが、日本ではそうはいきま

せん。ブラジルでは、上司や先生以外の同僚や同じ生徒などに命令や注意されることはあまりなく、それに対してむっとくるか相手にしないかが多いので、それが続くといじめやケンカになってしまつのも少なくありません。この習慣の違いを担任の先生たちが知っていて両方にフォローができれば少しはいじめも減るものではないと思います。

〈以下略〉

「美濃加茂国際交流協会だより NO・25」より

## 互いを理解することから



美濃加茂国際交流協会 会長 板頭芳樹さん

美濃加茂市も現在のよう  
に、3,900人を超え  
る外国の人が住むよう

になり、私たち市民も、「国際共存」のあり方を考えなければいけない時代が来たと思います。

そこで、私たちの協会では、この問題を市民の皆さんと一しょに考えようと、11月下旬に「外国人に関するシンポジウム」を開催することになりました。

市民の皆さんも国際共存のあり方を考えたり、在住外国人の文化や考え方を理解するとともに、また、在住外国人も日本の文化などを理解する機会になればと思います。

注) このページは、広報コミュニティ係が担当しました